令和6年度 学習分析事業 改善計画シート 三原市立沼田小学校

【別紙】

1 本年度の結果

①学力定着分析 NRT 偏差値平均(全国を50とする)

		2年	3年	4年	5年	6年	全体
国語	前年度結果 偏差値平均	/	59	47.8	57.4	47.7	54.4
	本年度結果 偏差値平均	51.8	52.6	46.7	57.2	41.5	50.9
算数	前年度結果 偏差値平均	/	59.8	52.8	53	41.3	52.8
	本年度結果 偏差値平均	51.2	55.7	51.3	56.2	44.8	52.4
理科	前年度結果 偏差値平均	/	/	/	56.4	41	51.8
	本年度結果 偏差値平均	/	/	54	53	34.7	48.3
全体	前年度結果 偏差値平均	/	59.4	50.3	55.6	43.3	53.2
	本年度結果 偏差値平均	51.5	54.1	50.7	54	40.3	50.9

②全国学力・学習状況調査 正答率平均(第6学年対象)

教科	国語	算数
前年度結果 (対県比)	76 (110)	73 (114)
本年度結果 (対県比)	58 (84)	47 (73)

2 令和5年度について

①調査から明らかになった課題

<p>【年度当初の学力について】(NRTをうけて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●評定1・2の児童が8名(21%)いる。評定5の児童が4名(10%)で、評定5の児童がいない学級が3学級ある。 ●国語では、考えや感想を持って伝え合う(全学年平均52.9%)、目的に応じて工夫して書く(全学年平均62.1%)に課題があった。 ●算数では、図形領域(全学年平均66.4%)に課題がある。4・5・6年のわり算(平均51.3%)、5・6年の変化と関係領域(平均52.2%)に課題がある。 ●理科では、4年乾電池と豆電球(40.8%)、磁石の性質(51.9%)、5年天気と気温・雨水と地面(27.7%)物の温まり方や体積の変化(36.7%)、6年物の種類や水の温度と溶ける量(60%)、振り子の動きとそのまわり(68.3%)に課題がある。 	<p>【年度当初の学力について】(全国学力・学習状況調査をうけて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国語では、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する(40.0)、原因と結果など情報と情報との関係について理解している(50.0)、学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う(60.0)に課題があった。 ●算数では、高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述する(10.0)、正三角形の意味や性質について理解している(30.0)、百分率で表された割合について理解している(40.0)に課題があった。
--	--

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標(何を、どの程度達成するか)	達成のための具体的取組(どのようにして)	スケジュール	検証の指標・目標
<p>【授業改善を通じた学力・学習意欲の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全教諭が、「問いの設定」を意識した授業を実施できるようにする。 ○全学級で、自力解決の場面で自分の考えを書けるようにする。 ○全学級で、自分の言葉でまとめや振り返りが書けるようにする。 ○全学級で、当該学年の漢字・計算が定着できるようにする。 	<p>①結果分析シートを活用した、NRTの振り返りによる実態把握と改善計画の立案 ②研修による、全教諭での改善計画の共有(児童中心の授業展開・意図的な説明場面の充実、「分らないの記録」ノート指導・着下指示、考慮の取組) ③全学級で、帯タイムを活用した校内漢字・計算検定に向けての反復練習及び検定の実施 ④全学級で、毎週木曜日の帯タイムに、「一〇〇マス作成」の実施 ⑤全教員による全国学力・学習状況調査の結果分析による実態把握・課題の調査と改善策を低・中・高でチームワークで検討し、いつでもそこ立ち回れるよう保存し、課題のある問題の解説及び定着 ⑥全学級で、アシストシートを活用したドリル学習の実施 ⑦全学級で、NRTの類似問題を作成・実施 ⑧あらゆるしやキーワードの把握・語彙力増加をわらう読書推進</p>	<p>①6月 27月～ 33連休日と検定日(7月14日、12月14日、3月14日)を 明らかにし、それに向けて帯タイムを実施(内容・国算 を2回ずつで内1回は作文) ④実力テスト(書か問題)の実施日(9月7日、12月7 日)を明確にし、それに向けて週1回帯タイムで実施 ③④とも条件を満たさない児童へは担任外での個別 指導の徹底) ⑤8月 ⑥1～4月の週2回ずつ国算を継続する ⑦1～4月 ⑧9～4月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Q-U2回目の学習意欲の数値向上(全学級で1学期以上) ・漢字・計算検定90点以上の児童100% ・漢字計算検定初回と検定日の当初比120%以上(NRT評定1・2の児童) ・実力テスト(書く問題)0点の児童0人 ・算数科単元テスト「知識・技能」の平均70点未満0人 ・算数科単元テスト「思考・判断・表現」の平均50点未満0人 ・「必須書冊数」達成90%
<p>【学級・学習集団づくり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全学級において、肯定的な相互評価を行う。 ○全学級において、支持的風土の醸成をめざした望ましい学級集団づくりを行う。 ○全学級において解決する課題を設定し、協力し合う取組を行う。 	<p>①学級ごとのQ-U結果分析による、実態把握と改善計画の立案 ②研修による、全教諭での改善計画の共有・実行 ③特設校内委員会や研修による、学級や児童の様子の共有 ④学級ごとのQ-U(2回目)結果分析による、実態の把握 ⑤帯時間にグループエンカウンター(定期的な実践交流) ⑥「わからない」を「わからない」と言い、学び合える授業の実施 ⑦「成長の木」による、達成感のある全校的取組 ⑧各学級の実態に合わせた「沼田つチャレンジ」による、進捗状況を見える化した取組</p>	<p>①6月 27月 ③毎月1回以上 ④1～4月 ⑤毎週月曜の帯時間に継続(実施を共有フォルダで 紹介) ⑥毎日 ⑦毎月更新 ⑧学年ごとに設定(1～2ヶ月に1回)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Q-U2回目の一次支援の数値向上(全学級で1学期以上) ・Q-U2回目の三次支援を必要とする児童の減少 ・Q-U2回目のクロス集計表における「A」、「B-1」、「B-2」に該当する児童の増加

3 令和6年度について

①調査から明らかになった課題

<p>【学力調査について】</p> <p>(NRTをうけて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●評定1・2の児童が、12名(24%)いる。 ●国語科では「書くこと」、算数科では「数と計算」「データの活用」、理科では「季節と生物、人の体のつくり」「電磁石、振り子の運動」に課題がある。 ●3教科とも、「知識・技能」に課題のある学年が多い。 <p>(全国学力・学習状況調査をうけて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国語科では「話すこと」の整理方法やメモの役立て方、話し方の工夫の理解に課題がある。また、文章を読む速さにも課題がある。 ●算数科では、「変化と関係」「データの活用」に課題がある。特に、「速さ」の意味理解が不十分である。また、解決のために必要な情報を読み取ることに課題がある。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点取組等

重点取組(上記課題を踏まえたもの)	具体的方策(継続して取り組めるもの)	検証指標及び時期
<p>【学力向上について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとまった文章を書くこと ・四則計算の確実な定着 ・基礎的・基本的な言葉及び漢字の定着 ・文章の要点を捉える 	<ul style="list-style-type: none"> ①全学年全教科等でのR80の実施(必須) ②帯タイムを活用した計算検定の実施 ③帯タイムを活用した漢字検定の実施 ④キーワード、キーセンテンスへ下線を引く活動の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○まとめ・振り返り場面で自分の考えを書いたり、学習の様子を評価したりできる児童の割合【R80】達成率100% ○漢字検定・計算検定90点以上(再テストも含む)90% ○算数科の単元テスト「知識・技能」到達率70%未満、 「思考・判断・表現」到達率70%未満(再テストも含む)0人 ○キーワード、キーセンテンスへ下線を引くことができてくる児童の割合100%
<p>【学級・学習集団づくりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支持的風土の醸成 ・安心できる居場所づくり ・児童生徒が主体の絆づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ①帯時間にグループエンカウンター(相互評価を取り入れる) ②「わからない」を「わからない」と言い、学び合える授業の実施 ③「成長の木」による、達成感のある全校的取組 ④児童会を中心とした縦割り班活動の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童アンケート自己肯定感の割合「前と比べて良くなったと感じている児童の割合」80% ○Q-U2回目の一次支援の数値向上(全学級で1学期以上) ○Q-U2回目のクロス集計表における「A」、「B-1」、「B-2」に該当する児童の増加